

2002年4月23日第三種郵便物認可（毎月3回5の日発行）
2004年6月26日発行 SSKW 増刊 通巻第239号

SSKW

海から海へ

No.3 2004.6.26 【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0026 東京都調布市小島町1-11-6

エンケ104 TEL & FAX 0424-41-2958

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



ドライブ 910x1167 © Mizuki Tanaka 1994

海から海へ は、瑞木さんの60余点の絵がいつでも誰でも見られるように、みずき美術館を設立する準備をしています。ご協力をお願いします。

4月11日開所式

阿部公輝

4月11日の開所式の報告に先立ち、はじめにこれまでのことを振り返ってお話をしたいと思う。

画家瑞木が生み出すすばらしい作品を前にして、私は感動する。彼女の日々のふるまいに接し、私は感動する。あなたも同じ、あなたの中の良いものに目を向け、しっかり生きなさい、と励まされる。彼女を知る誰もがそうだろうと思う。

阿部愛子の実践と研究は、いのちの電話の相談員にはじまり、臨床心理学専攻大学院へと進んだ。多くの人と感動を分かちあいたい、いただいたものをお返ししたい、人の役に立ちたい…。私たちは何かできることをしたいと思った。昨年の6月のことである。

大学時代からの私の友人HY君は、神戸の大学で物理学を教えている。毎週土曜日全身性障がいをもつ人の介助に通って11年になるという。彼の授業はユニークである。実験を通して考えるきっかけを与え、物理学というアプローチにより、世界の意味を探る筋道を教えるのだという。彼は神戸から来た。「うまい酒があるぞ」という誘いに惹かれてのようでもあるが…。障がいをもつ子の親YTさん。はじめて会った彼の息子さんは「走ろう」と私を誘った。(彼は後述の「ひのひのクラブ」の仲間である。)一緒に走ったあのかのときのことを私も彼も忘れない。ご両親の愛をいっぱい受けて育った彼の人懐こさはあのかのときからのものである。柔らかいこころのTSさんは、妻の友人。ある外国の友好協会に勤務する傍ら、トルコ語を大学で教えている。障がいをもつSTさんは、出版社を経営している。30数年にわたりたくさんの良い本を出してきた。(「絵はコミュニケーション」もその一つ。)

昨年6月、このような人たちが調布に集まり「海から海へ」の設立を決めた。事務所はSTさんの会社に置かせていただいた。その年11月の臨時総会では次年度の調布を拠点とした本格的活動が話し合われた。

愛子はこの3月、修士号をとった。学校を卒業してから長い年月を経た後、再び学校に通い、始めて学ぶ学問分野でのことである。「知的障害を持つ子どもの親の心理」という修士論文は、東京、神奈川、新潟、神戸、大分、福岡の16人の親へのインタビューをまとめたものだ。障がいをもつ娘に励まされ、ある地点に到達した彼女の精進の実りは、私たちにとって大きな喜びであった。

調布駅近く2部屋のマンションに、「プレみずき」と「こころとふくしの相談室」を開設することは前号でお知らせした。

以来私と心理相談員は、ピクチャレールを取り付け、箱庭の人形を置く棚を作り、いすを組み立て、ソファをしつらえた。棚の製作といすの組立てには画家の手も借りた。冷蔵庫などたくさんのお世話を皆様からいただいた。「うつわ和季」のTKさんのお世話で、卓球の専門家KKさんの設計による立派な会議テーブル兼卓球台も搬入された。絵の選択、配置決め、展示、パンフレットの作成…。どの作業も楽しかった。そうして迎えた4月11日…。

開所式には狭いところに40人を超える方がおいでくださった。画家の「平和」の書が玄関で皆様をお迎えした。小学校時代の恩師が、彼女が4年生の時に書いたものとおっしゃって額装して数日前届けてくださったものだ。精神保健福祉士の勉強をされているYSさん、画家に毎土曜日調理を教えてくださいな MAさん、「ニュースの森」で彼女の携帯電話に答えたTFさんは当時の学級のお母さん方だ。

展示された絵の前で、はじめは立ったままだったが、そのうち皆さん床に座り込んで話をされた。画家の後輩で一人暮らしをしているSNさんは、ピープル・ファースト東京の代表で、厚生労働省の検討会作業班メンバーなど、障がい当事者として活躍している。人の話を傾聴し、笑顔がすばらしい青年である。陶芸ワークショップには是非参加したい、と話された。

青梅からこられたOHさんは陶芸家。青梅での展覧会に画家が出品した作品を預かってもらった。OHさんはその展覧会の実行委員をなさっていた。絵を受け取りに伺って、私たちははじめてお連れ合いのOAさんとお会いした。お二人とも飾らないお人柄そのままのスピーチだった。

日野にあるフリースクール、飛ぶ教室/ひのひのクラブのTHさんは、月間活動プログラムに海から海への開所式を組み入れて下さった。障がいをもつ子のお母さんOSさん、DYさん、高校へ入学したNAさん、言語聴覚士のIMさんたちがやって来た。映画、遊園地、まんが喫茶などを一緒に楽しむ画家の仲間である。卒業した人もそのままずっと教室に来るので「クラブ」と言うとのこと。IMさんは言語聴覚士の仕事をたいへん分かりやすく説明された。

大地塾のKTさんとは、妻が大学でお世話になったHH先生のご縁だ。昨年先生の研究室の集まりに妻と一緒に邪魔したとき始めてお会いした。たくさんのお本を書かれ、子どもと共に自身が成長したと語る。(元参議院議員。お子さんのKTさんは現国会議員。)お連れ合いの医師は、新潟県浦佐で高齢者が地域生活する場を設け、日々考えを元に実践している。浦佐の病院には画家の絵のレプリカが飾られている。私の職場の先輩TT先生は、KTさんと同じ高校の出身と知り、お二人とも驚かれていた。

障がいをもつお子さんORちゃんとお連れ合いのOTさんを伴って、OKさんも来られた。新進気鋭の社会福祉学者であるOKさんは、いつもメーリングリストで重要な情報を流してください。支援費の介護保険への統合問題を論じる添付の拙文は、彼の情報に負うところ大である。

開所式で初めて出会った何人かの方が、福祉の勉強で同じ学校で勉学中または卒業されていたことが分かって驚かれた。こころざしを持たれ日々実践し、考え、自分も育つ、という人たちの集まり…。その中の一人KSさんのお子さんKRさんは、KTさんのお子さんと同じく、イギリスのフリースクール「サマーヒル」に在籍していたと知る。YTさんの仲間のDYさん親子、DYさんの友人TYさん、TYさんの友人KJ・KYさん夫妻とつながっている。

いのちの電話の仲間も大勢来てくださった。お願いした時間より1時間も早く来られたYJさんは、準備や受付などでおおいに働かれた。あまりの人の多さにびっくりして帰られてしまったが、熟達した心理臨床家として相談室を導いてくださるX先生からは、温かい祝福の言葉をいただいた。

フラダンスをなさるITさんは妻の幼友達である。こどもの頃妻は、下駄の鼻緒を上げる彼女のお父様の熟練した手際の良さに見とれたという。動きの美しさは、芸術作品の形や色の美しさ、花や生物の美しさに通じ、制御された謙虚な人間の営みから生まれると思う。

ご夫君と長野で障がいのある人の乗馬などの活動をされているシンガー・ソングライターHYさんとは1年半ぶりにお会いした。「お馬はパカパカ」や「ルルドの泉」など、ギターの弾き語りはずてきだった。このときの縁でICU高校からも招かれたという。

地元の都議会議員EMさんや国會議員YIさんからは、乾杯の音頭やご挨拶をいただいた。この4月東京都はグループホームへの家賃補助増額を決めた。(これまで実質0だった。)いろいろな方の働きがあつてのことと思う。感謝する。

日経新聞に添付の記事が掲載された。(写真の画家が手にしている「くるくるレインボー」は、共にあゆむネットワークのAM先生から贈られたもの。)たくさんの方が記事を読まれ連絡を下された。取材に訪れすてきな記事を書いてくださった記者MH氏に感謝する。掲載は、私と心理相談員がニューヨーク州シラキュース訪問から帰国した日の前日のことであった。本号では彼女がこの訪問の報告をする。

海から海への出発を祝い、ここにはとうてい書ききれないほど、たくさんの方々からすてきなお話と大きなお力をいただいた。また、当日集まれなかった遠方の方々、海外在住の方々からもメールが届いたことをお知らせする。この場をお借りし、心からお礼申し上げる次第である。

プレみずき (1)

調布市小島町 1-11-6 エンケ 104

6/1~7/31は、以下の作品を中心に展示しております。どうぞお気軽にお出かけください。

作品	タイトル	サイズ(mm)
5.	ヨット	333x242
6.	画室のわたし	530x455
7.	さかな	455x530
15.	バラ	530x455
17.	雨の日のママ	727x606
24.	出沢さんとわたし	606x500
34.	プール	727x606
35.	蝶とカーネーション	727x606
38.	ひまわり	1167x910
47.	くじらといか	910x1167
45.	7羽のうさぎ	727x910

火・水・土 13:00 17:00 open

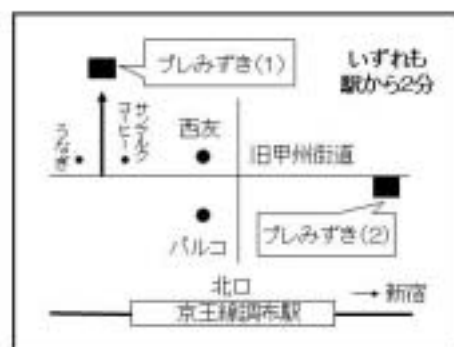
月・木・金・日・祝 closed

なお、8/1~9/17は、休館とさせていただきます。第3回展は9/18よりオープンいたします。

プレみずき (2)

調布市布田 1-43-3 オリエンタマンション1階
うつわ 和季 ウィンドウ

期間	作品	タイトル	サイズ(mm)
6/1~6/30	21.	ピエロ	727x606
7/1~7/31	61.	ふたりの海水浴	910x727
8/1~8/31	16.	バレエ	727x606
9/1~9/30	28.	ノンちゃんとブルちゃん	606x727



シラキュースの報告

阿部愛子

ワシントンでの人間発達心理学会を終え、空路シラキュースへ。シラキュースはワシントンから北に1時間あまり。飛行場にはプロペラ機が待っていた。乗ってみると左右に15人ずつしか座れない。「小さな飛行機の方が安全で聞いたことがある」と言うと、「そうだよ」と夫が答える。どうしてもシラキュースに行きたい。二人とも心を強くして乗り込む。

窓からは、広大なアメリカが広がって見える。雲が多いので機体が揺れるでしょうと、ちょっと太目のスチュワードさんの説明通りだったが、無事シラキュース空港に着陸した。外に出ると空気は冷たい。おまけに大粒の雨が降っている。約束したシラキュース大学大学院博士課程教育学専攻の笠原真帆さんの姿は見えない。日本で言うところの町に該当するのかなと考えてみる。ちょうど東北の山形あたりであろうか、一緒に降りた30人の姿はもうどこにもない。待っているしかないねと夫といすに腰掛ける。

そのうち、真帆さんが「はじめて空港に車で来たので道がよく分からなかった」と言いながら、現れた。初対面の挨拶はそこそこに、車に乗り込む。実は、あるメーリングリストに双方が参加していて、シラキュースに日本人の学生さんがいることを知った。真帆さんは快く、今回のシラキュース訪問のコーディネートを引きうけてくださった。シラキュースではまだゲストをお迎えしてないので、阿部さんたちがはじめてという初メール以来、何度もやり取りしているので、初めてという感覚がお互いにならないことに気づく。メールはすぐに届くので、会話をしているような気分がある。手紙ではこうはいかないと思う。

私は『ソーシャル・ロール・ヴァロリゼーション』の著者W. ウルフエンズパーガー(元シラキュース大学教授)のいう、障がいのある人たちの価値の役割についての考え方に影響を受けている。アメリカに行くなら、ぜひ、ウルフエンズパーガー先生に会いたいと考えていた。そんな私の思いを夫は理解し、学会の帰りにはシラキュースに行こうよということになった。私たちはそこへ行けば、何かあるはずくらいであったが、真帆さんと連絡を取るうち、彼女がある会合のパーティで、偶然出会った方(パムさん)はウルフエンズパーガーやスティーブ・タイラーらと一緒に働いてきた一人だったと知る。そこで、私たちの訪問を話したところ、見学先や訪問先など協力して下さることになった。私の研究は障がいをもつ子どもの親の方々の心理についてをテーマとし、国内で親にインタビューを続けているが、アメリカでも親の方にお会いすることが可能になったのはこの方々のおかげという訳である。そのような準備をし

てくださっていたので、到着した夜にさっそく、パムさん、真帆さん、私たちで、翌日からのスケジュールを確認する。2泊3日の滞在で効率よく勉強をさせていただけるよう、完璧なタイムスケジュールができていた。そのことだけでも、感動してしまう。いったいどんな出会いが待っているのだろうか。



真帆さんとパムさん

さて、このレポートは、シラキュースで出会い、学んだことをお伝えする。短い滞在だけれど濃い内容を、一度に報告するには紙数に限りがあるため、5回に分けて報告する。まず1回目はシラキュース大学における障がいのある人のオン・キャンパス・プログラムについて、コーディネーター、シェリー・パトersonさんへの取材をご紹介します。

現在、シラキュース大学では6人の障がいをもつ人が授業をとっている。単位制ではなく聴講生という資格で、音楽や人類学に参加している。授業はなんでもとることが可能である。障がいは自閉的傾向、情緒障がい、レットシンドロームなどで18歳から21歳までの方である。授業料はなく、行政とのパートナーシップで認められている。授業に出るときは必ずティチング・アシスタント(TA)が1対1で障がいのある方を支えている。

オン・キャンパス・プログラムについて、自閉傾向の方は「いろんな学生がいるのに、この私をつかまえて障がい者と言うのは何ごとだ」、他の学生は「こういうのをどんどんやっていくべきだ。世界がどういう形なのかを教えてくれる。下手なテキストより学ぶ」などそれぞれ反応があると言う。大学側は「障がいのある人はラベルが付いていて、自尊心が低い、入学するとプライドが変わっていく」と言う。音楽の教授は受け入れを喜び、テキストを少し手直ししたり、TAのあり方などにも注意を払っている。TAが安心してアテンドできるようにTAのトレーニング用に章立てのテキストを用意しているそうだ。



シェリー・パターさん

コーディネーターのシェリーさんの役割は、障がいをもっている学生一人ひとりに宿題を短くしたり、興味をもてるようにアドバイスをしたりする。もちろん授業を受けたいと言う人に会い、教授との橋渡しをする。「苦労は」と聞くと、「座るのが難しい人がいること、静かにしている必要のある場合に『ヒャ』『ワハハ』など、反応するときの声の使い方の難しさなどを学生や教授に理解してもらわなければならないこと」と言う。

授業に参加しているレットシンドロームの女性の母親に会った。毎週火曜と木曜に1時限ずつ参加している様子を納めたビデオを持参してくれた。TA が関わる様子やシンフォニーを45分間聞いているシーンが映し出されている。眠そうで退屈そうな様子である。授業が終わった後にTAが「どうでしたか」とgood, ordinary, bad, otherと4語書いた1枚の紙を示して聞くと、彼女はbadを指した。なぜbadなのか知りたかったが、彼女がいないので分からない。母親は「娘は授業への参加を楽しみにしているし、娘の生活の広がりが出て、このオン・キャンパス・プログラムが始まったことに自分自身とても満足している」と感想を述べてくれた。

「大学で授業を受けることはこの辺のローカルなカレッジではかなり開かれている。メリーランドやハワイなど他でもやり始めている。しかし、アカデミックなところでは門戸は開かれていない」とシェリーさんは説明した。もっと詳しくその理由などを聞けばよかったと後になって思う。大学で勉強をしたいとねがう知的障がいのある人は世界中に多くいるだろう。シラキュースに住む人たちが支援を受けながら実践している。

次号からは以下の報告を予定している。

- ・オノンダガ・コミュニティ・リビング
- ・ニューヨーク州立シラキュース発達サービス事務所
- ・センター・オン・ヒューマン・ポリシー
- ・シラキュースの4人の親



シラキュース大学

会計報告・事業計画

2004年5月29日、通常総会が調布市小島町1-11-6エンケ104にて開かれ、下記の会計報告と事業計画が承認されました。

平成15年度会計報告 (単位：円)

I 経常収入の部	
1. 会費収入	187,000
2. 寄付金収入	482,257
経常収入合計	669,257
II 経常支出の部	
1. 事業費	
(1)障がいをもつ人を中心とした芸術活動の支援と作品の公開展示	275,399
(2)障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究と実践	302,304
(3)障がいをもつ人を中心とした交流の促進	222,331
(4)芸術、教育、心理、福祉などに関する社会教育	35,287
(5)障がいをもつ人とその関係者のための個別相談、教育支援、生活支援	51,585
(6)活動に関する広報および成果の公表	327,420
(7)(1)～(6)の事業活動のための募金	9,491
2. 管理費	
通信運搬費	7,490
経常支出合計	1,231,307
経常収支差額	562,050

平成16年度事業計画

障がいをもつ人の社会的価値の転換を図り、当事者とコミュニティの発達に寄与することを目的として以下の事業を行う。

第1に、障がいをもつ人を中心とした美術館の前段階として、常時10数点の作品を展示できるスペース「プレみずき」を調布市に開設する。小スペースであるが、年間5回展示作品を交換し、1年で計60数点の作品が鑑賞できるようにする。また、数年前から調布市内商店主の協力で行われてきた街中での芸術作品の展示を本年も継続する。さらに、人々が広く交流する場を提供するため、神戸市でも美術展を開催するとともに、障がいをもつ油絵作家の画集を制作・出版する準備を進める。

第2に、障がいをもつ人を中心とした心理と社会福祉実践活動を行う場として「こころとふくしの相談室」を開設し、同相談室において心理カウンセリングを行う。また、相談室に、「こころとふくしの研究所」を併設し、同研究所を拠点として、障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究を行う。具体的には当事者と親とコミュニティの相互作用が各々の発達に与える影響について調査研究を行い、結果を公表する。成果を基に立法行政への提言を行う。

第3に、障がいをもつ人を中心とし、陶芸、絵画、フラダンス、卓球などのワークショップを開催することにより、障がいの有無にかかわらず、それぞれの興味分野での交流を通して、ともに発達する場を提供する。

第4に、臨床心理学研究生を対象としたワークショップを開催する。臨床心理研修を行うことにより、人材育成に寄与する。また、地域の人々が主催するコンサートの企画に協力し、コミュニティとのつながりを深める。

第5に、「こころとふくしの相談室」において、知的障がいをもつ当事者とその関係者を対象とし、個別相談、教育支援、生活支援を行う。

第6に、年4回会報を発行するとともに、活動と成果を随時インターネットホームページで公表し、コミュニティからのアクセスを容易にする。会報を第三種郵便で刊行するため、本団体が郵便規則第21条の2第1項第2号に規定する心身障がい者の福祉を図ることを目的とする団体であることの証明を、東京都福祉局から得る。

第7に、上記事業を推進するため、各種助成金への応募を積極的に行う。



さかな 455x530 © Mizuki Tanaka 1987

編集後記

※5月に発行を予定していた海から海へ第3号は通常総会開催と第三種郵便物の認可の諸手続きのため1ヶ月遅れとなりました。

※6月13日静岡県立大学で開催の障害学会第1回大会に参加してきました。研究者があらゆる分野で障がいを捉えなおそうと試みている世界にあって、日本もようやくといった感があります。

※私たちは障がいがあるとなかろうと対等であることをどうやって学ぶのでしょうか。今後は活発に活動と研究が進められることとなります。枠組みを自由に広げ、重層的で、横断的に研鑽を深めることにより、私たち人間の未来の英知が手に入る、そんな予感さえます。

※次号は8月末発行予定です。

(愛)

年会費：正会員 3,000円以上 協力会員 1,000円以上
賛助会員(団体) 30,000円以上

振込先(ご寄付の場合も下記宛にお願いします)

口座名称：特定非営利活動法人 海から海へ

郵便振替：00110-0-684539 または

銀行口座：みずほ銀行 調布支店 普通預金 8082621

特定非営利活動法人 海から海へ
http://umi.or.jp office@umi.or.jp

2004年6月26日 海から海へNo.3

編集責任者 阿部公輝

〒182-0026 東京都調布市小島町1-11-6 エンケ104

Tel & Fax 0424-41-2958

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砩6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200円

無断転載禁止